私の持論

愛媛大学大学院理工学研究科教授 渡辺 裕
Yutaka Watanabe

私の2つの持論を述べさせていただきたい。

そのひとつは有機合成化学協会の担う役割は大きいというもの。学部4年生の時、有機合成化学協会誌を研究室で見た。これは面白いと感じ、すぐ学生会員となり、総説をよく勉強した。今の研究室の学生にも入会を勧めることにしている。社会に出たら正会員となるようにも言っている。その意味は、有機合成並びに関連分野の産学関係者が集う場を有機合成化学協会(有合化)が提供し両者の発展に寄与しているからである。企業の研究者・技術開発者も個人的に関わって欲しいと願っている。

有合化は昭和17年に発足している。戦争のさなかである！有機合成化学工業に関係のある“軍・官・学・産”が緊密に連絡・協調して有機合成を進展させるのを主な目的として学術振興会の肝いりで始まったという。戦時下必要な火薬や爆薬、合成樹脂や燃料等の有機合成化学工業の進展のため学者、研究者、技術者が結束した状況がうかがえる。まさに、時の要請から本協会は誕生した重要な(重責を負う)学会なのである。この発足当時のポリシーは時代の背景は変われども今も変わらないと思う。昨今、日本は何かと勢いが低迷していると言われる。ジャパン・アズNo.1の時代はどこに行ったのであろうか。その勢いを取り戻すために産学の密接な連携・協調が重要であり、そのために有合化の担う役割は大きい。

現に有合化の事業は多岐に渡っている。催物としては講習会、シンポジウム、セミナーさらに懇談会等があり、学生を含む学と産からの参加者が集う。催物の中身は濃く、参加者のアクティビティも高く、参加して良かったと誰しも思う。その際、まさか日本を活発にしようとは意識しまい。しかし、現状を踏まえ産学の密接な連携・協調の重要性を今一歩踏み込んで強調することも必要なのではないかと思っている。また、催物の開催地域に偏りがあるので、より多くのステークホルダーに関わりをもってもらうための方策を考えるのはいかがだろうか。

有合化の会員は工学、理学、薬学、農学等の学際領域と化学、製薬、食品等の産業界の様々な分野に属している。アカデミアの縦糸と産業界の横糸から緻密に織りな

されて浮かび上がる模様こそが日本の今後のあるべき姿であり、有合化はその機(はた)織りであって欲しい。学生会員は縦糸にも横糸にもなる大事な人材であり、先を見据えた啓蒙的な活動(事業)が望まれる。

学生の教育に関する私の持論のひとつは、マークシート式試験は学生を毒する、ということである。

高校では大学入試を目標に教育され、マークシート式のセンター試験を受ける。こういうマークシート式試験では考える力が培われず、自分の考えをもった人材が育たない。なぜこう強調するかというと、私の体験に基づいている。私は薬剤師の国家試験を受けた。試験前日に過去の問題集を開いてみた。しかし、満足な解答ができるのは半分もなかった。これでは合格しないと思って試験に挑んだが、なんと、楽勝で解答でき合格した。なぜ合格できたかというと、私たちの代から筆記式試験からセンター試験と同じマークシート式になったからだ。後者では解答が見えている。五者択一で1/5の確率とはいえ、3つ程は正答ではないと分かり、残り2つから正答がわからなくてもどっちかを選べばいいことになる。

このような試験に慣らされて入ってくる学生は思考力に乏しく自ら解析する力も育まれていない。さらに、要らないものから消していく消去法に慣れている。これでは自らの考えで確信のある答えが出せない。こんなことから、学生には勉強の仕方をリセットして考え直すよう訴えている。しかし、現実はまだまらない。

今後センター試験も大きく変わりそうだが、詰め込み暗記があたりまえの教育から、自ら考える思考力を育む教育にマッチしたものとなることを望みたい。

私の後者の持論は次元の低い話だと思われる方も多いかもしれない。しかし、少数のエリート層は別として、多くは大学入試に大きな影響を受け、大学に入って考える習性がそがれている。この層こそ活性化して思考力、応用力ひいては創造力を高め、将来の担い手となってもらわねばならない。そのための大学・大学院教育が改めて問われる。有合化にも是非役かっていただきたい。

(2014年9月2日受理)